
小雨より遙か

雨音紗遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小雨より遙か

【Nコード】

N3914BA

【作者名】

雨音紗遊

【あらすじ】

しがらみを抱える少年と縛られた少女のお話。
キーワード掌編です。

「貴方の目にはなにが映ってますか？」

と、女の子は言った。

彼女がなにを望んで質問しているのか、仁志には検討がつかなかった。ただ有りのまま伝えていいのか、柔軟な言葉を用意しないといけないのか。それとも初対面つぼく「初めまして」と言うべきか、不透明で怪しいため無視を決め込めばいいのか。

結局どの選択肢が正しいか判らず、仁志は黙ったまま女の子を見つめた。

「どうしました？」

「ああいや、どうだろう。ぼくにその質問は難しいかもしれない」

「そうなのですか？」

別にそんなことはなかった。ただそう言わないといけないような気がしただけだ。答えるだけなら誰でもできる。でも、すぐにそうしなくなっただけ。

低い丘が広がっている。冬と春の線引きは難しいけど、間違いなく春は到来していた。いまは湿っているが、一面の緑の絨毯の上、ところどころピンクの息吹がかかっている。

女の子は大きな木の幹を撫でるように片手をそつとあて、嬉しそうに言う。

「私には貴方が見えます」

「それなら、ぼくにもきみが見える」

「私と会話をしてる貴方が、見えます」

「それは当たり前だよ。おかしいことを言うね」

「なら、そのイヤホンは、音が鳴っていないんですね」

くすり、という女の子の息の漏れまで聞こえた。確かに言葉のとおりに、仁志は耳にイヤホンを差し込んでいた。しまった、と思わず苦い顔をつくる。仁志は登下校はもちろん、学校でも家のなかでも

イヤホンを着けて生活している。特に意味はない。意味なんてとうに消えてしまい、今では習慣になっていただけだった。それでも、意味がないわけでもない。

目を向けると、女の子はこちらを見て笑みを貼りつけたままだった。

「……もしばくが気づかないフリをしたら、どうしてたの？」

「その時はその時です。貴方は返事をしてくれました。私と目を合わせたまま」

「変わってるね」

「貴方ほどじゃありません」

そのとおりだった。口から笑いの息がでてくる。

仁志は学校からの下校中だった。ここ一帯の地域は住宅街とはかなり離れている。少なくとも学生が、こんな平日の昼間からここにいるのは異常なことだ。

「……あの。悲しんで、いるのですか？」

「それはどうして？」

極めて自然なふうには怪訝な表情で聞き返す。

——どうしてわかったのだろう。

少なくとも表情に出さないようにしていたのに。どうしてバレたのか納得がいかず、またほんとうにバレたのかを確認するように仁志は言葉を継ぐ。

「雨が降ってるからじゃないかな。いまは小雨だけど」

「……そうかもしれませんね。私は、ちょっぴり悲しんでいるのですよ。こうして一年に一瞬だけの機会を、雨で無くされてしまったのですから」

「ああ。桜のほとんどは、散ったみたいだね」

言って、女の子の隣の木を仰視する。ほとんどは枝で、蕾と花びらが少しあるだけ。

女の子はひどく悲しそうに言うけれど、仁志は美に強い興味も執着もなかった。美しいものを美しいと感じ、綺麗なものを綺麗と言

う、そんな一般的な感性しか持ち合わせていない。

また来年まで待てば、いくらでもみれるというのに。

そこまで見たいなら、まだ咲いているところにいけばいいのに。喉の先にまで出かかった言葉を仁志はあやういところで引っ込める。あまり言わない方がいいかもしれない。何気ないことで、触れられたくないことなんていくらかでもある。

「寒くない？」

代わりにありふれた話題に変えてみる。

春でも雨の日は手が青ざめるほど冷えこむ。女の子は桜の木の下にいるからか、濡れた様子はなかった。けど、これから本降りになると、やっぱり傘は必要になるだろう。

鞆から折り畳み傘を取り出して女の子に手渡す。こういう偽善行為も、しっかり自覚していればなんてことはなかった。これが正しいと思えることなら、やった方が絶対いい。

「どうして傘を持つてるのですか？」

差し出した傘をみて、女の子は目を丸くして驚いた。

「ぼくが傘を持ってたら変なのかな？」

「いえ……あるなら、どうして差さないのかと思ったんです」

「そういう気分だったんだ」

「雨に濡れたい、ですか？」

「ああ、うん。そんな感じ。だから気にしないで使っていていいよ」

そこまで説明して、ようやく受け取ってもらえた。空より青い色の傘。どちらかという男の子用だけど、女の子はありがとうと言ってくれた。

「じゃあぼくはもう帰るよ。きみも風邪を引かないようにね」

「あ、ちよつと待ってくれませんか？」

「え？」

踵を返そうとした足を止めて女の子を再度見る。

「なんの用かな」

「貴方に渡したいものがあるんです。傘のお礼と、貴方の目に映っ

たものを私に話してくれた記念品として」

そういえば、最初のあの質問は一体どういう意味だったんだろうか。

女の子がみえる。ただそう答えたけど、それは正解だったんだろうか。

「これを差し上げます」

「……ビー玉、だよね？」

手に乗つけられたのはビー玉だった。それ以上でも以下でもなく以外でもない。ただ虚を突く意外なモノを貰ったので、仁志は少し面食らってしまった。

冗談かと顔を向けるが、女の子はふざけるでもなく説明してくれる。

「私はビー玉好きなんです。透き通って綺麗ですし、向こう側を見渡せますし、何より自分の姿を反射して映してくれます。赤色のビー玉を通して私をみると、悲しい時でも笑えているって自信がもてて。泣かないといけないときに青色のビー玉を通してみると、自分はちゃんと悲しい顔もできるんだって後押ししてくれる。……最初は綺麗ってだけだったんですけど、いつしか勇気のくれるモノになっていたんです。素敵なんですよ、ビー玉」

その話を聞きながら手のひらに目を落とす。ビー玉の色は緑だった。どうして緑なのか考えてみる。けれど仁志には、今の言葉を聞いても理由がわからなかった。

だから代わりになる言葉を口にするしかない。

「いいの？ 大事なものでしょ？」

「私にはもう、必要ないものですから」

「それは――」

それはもう、悩み事が解決したってことなのかな？

……いや、違うのだろう。

いまにも涙をこぼしそうな表情で、くしゃっと笑う女の子をみると言葉が詰まった。

ほんとうに大事なもの。こんなにちつぽけなものでもそれは変わらない。

「ありがとう。ありがたくもらっておくよ」

それをくれるというのだから、きっと彼女にはなにかあるのだろう。

雰囲気で感じることを仁志は嫌うけど、なんとなく女の子とは気が合いそうな気がした。

「はい。大事にしてくださいね」

「うん」

そう言って笑う。女の子に見せ付けるように、顔の辺りにまで持ち上げて。

——あれ？

「……どうしました？」

「いや。なんにも、ないよ」

ふとした違和感を抱く。それは綿菓子 endpoint をつまんだ時のように薄れていくほど小さなことで、気のせいだと仁志は頭をふる。

「なんでもないよ。気にしないで」

「そうですか」

それから二三の言葉を交わして女の子と別れる。

途中で振り返っても、女の子はこちらに手を振ってくれていた。

手は振れなかったけど、振りたい気持ちが伝わってくれたらいいなっと思う。

「ちょっと仁志！ あんたなにやってんのよ」

翌日のことだった。朝起きると確実に遅刻決定の時間帯だったの
で、一限目が終えた頃合いを見計らって教室に入っていくと、仁志
に向けてわめく女子生徒がひとりいた。

毎日毎日、飽きもせず構ってくれる貴重な知り合い——おそらく

友だち未満の、クラスメイトだ。無口で通っている仁志に話しかけてくる人間は彼女以外いない。

「途中で昨日帰ったでしょ。ばっかじゃない？ そんなに目立ちたいの？ ほらまたイヤホンしてさ、取りなさいよ、失礼だと思わないワケっ？」

「……目立ちたいわけじゃないよ。取って欲しいなら取るから」

「えっ、あう、え？ ひ、仁志が……久々にまともにしゃべったわ失礼な発言だけど、まったくその通りなので言い返せなかった。」

「あ、ああ、ごめんごめん。でも驚いちゃって」

仁志の沈黙を別の意味でとらえたらしい彼女を放って、仁志は席につく。鞆から教科書やノートを取り出しながら、ひそかに声を確かめた。

まだ声がかすれて、話すときに裏返りそうだった。

でもこれにも慣れないといけないと思う。長い間、誰とも話そうとしなかった自分が悪いのだと仁志は自覚している。だからせめて、話すくらいは自分に許したい。

「じ〜〜〜〜〜」

「え、なに？」

名前も忘れた相手の方は、仁志を凝視している。一体おまえはなにがあったのかと詮索するような目だった。それを無視してポケットから小さな物体を取り出した。

「……なにしてんのよ」

「ちよつと覗いてるんだよ。うん、ちゃんという」

「当たり前じゃない。はっ、まさか『いない』とか言って、新手の嫌がらせでもする気じゃないでしょうね！ そうはいかないわよ」ひとり騒ぎ立てる女子生徒を、緑の窓越しにみる。

自分も、相手も、ちゃんとココにいる。

だから何色にでも変わるのだと——仁志は自分なりの解釈を試みるのだった。

(後書き)

『ビー玉』『桜』『雨』『幽霊』『イヤホン』

この単語で物語を赴くままつくりました。

読んでいただけるだけで非常に嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3914ba/>

小雨より遙か

2012年1月10日04時54分発行